青森県の市町村情報

階上町ミニデータ

●人　口　13,218人
（男6,645人、女6,573人）
●世帯数　5,999世帯
（令和3年1月31日現在）

●特産品
「どこさいだ~ハマさいだ~」（小学生が海水から作った塩を入れたサイダー）、階上そば、いちご煮など。

【概況】本県の太平洋沿岸の東南部に位置し、内陸には標高740mの階上岳を有する。多くの縄文遺跡が点在する信仰の地として、歴史と文化を誇っている。

わっせ交流センター、フォレストピア階上、ハマの駅「あるでぃ~ば」など、海も山も身近な観光施設が多数ある。

階上町発★キラリ

各市町村で活躍するグループ・団体・企業等を紹介します。
今回は『階上漁協女性部』をご紹介。
部長の荒谷恵子さんにお話を伺いました。

ハマの女性たちが地元食材で震災復興・活性化

階上町の大蛇地区にある「あるでぃ~ば」は、その日の朝に獲れた魚介類や、水産加工品が並ぶハマの駅です。その中に、階上漁協女性部が手掛ける軽食コーナー「あっぱぁかっちゃぁズ」があります。名前には強い母ちゃんの意味が込められています。

この地域は東日本大震災の被害を受けましたが、「津波被害からの復興のためこの施設ができた時、地元の食材にこだわった商品を作ってほしいという町の依頼で、出店を決めました」と代表の荒谷恵子部長は言います。乾燥した海藻をふんだんに入れた「おいしいお味噌汁の具」、ふのり入りドーナツ、焼き魚入りのお弁当や卵焼きなど手作りの温かさがこもる商品は、地元の人だけでなく、観光客からも人気です。「体に良いものを作りたいので、塩分控えめだけど美味しい、って言われるように試行錯誤の末にやっとできました」と荒谷さんは笑います。その甲斐もあり、「あるでぃ~ば」は、毎朝開店時間には行列ができるほど。砂糖を使わず塩分控え目の弁当や総菜を提供する直売所は、仕事や家事に忙しい人に便利でありがたい存在です。

▲階上漁協女性部長の荒谷恵子さん

地元の味・伝統を大事に「安心」「安全」をつなげたい

階上漁協女性部は、昭和61年4月に結成。モットーは、「浜の母ちゃん」たちが、楽しく活動していくために部員同士の意見を十分に交換し合うこと。結成後間もない時期に町が開催した「いちご煮まつり」で、2,000食の「いちご煮」を提供したことが地元で高く評価されました。「家庭料理であって大したものではない」と思っていた「いちご煮」がその後定番の郷土料理として全国的にも有名になりました。

40年近い活動の中で、「伝統料理の本」も出版。地元の味や古くからの料理法を後世につなげたいという思いが女性部の目標になっています。東日本大震災で加工場が壊滅した後も、町や漁協の補助により施設を整備し、さらに販売所も手掛けるなど、関係機関の協力と連携のもとに着実に活動の幅を広げています。

現在は会員8名。販売所での勤務は、各自の融通が利くように、柔軟な勤務時間でシフトを組んで、活動が長続きするような工夫もしています。外に出て活動するためには、家庭内での夫の協力も欠かせないという荒谷さん。現在は長男の妻も女性部に加入。幅広い世代の部員が交流することで、さらに新しい取組や地域に根ざした活動に期待が膨らみます。

私が男女共同参画を担当しています

階上町総務課
主事
伊藤　直美 さん

階上町では、中学生などを対象に、男女共同参画の視点を取り入れた避難所運営訓練を平成26年度から実施しています。当町は、日中町外へ働きに出る人が多く、日中の人口構成は中学生以下の子どもと高齢者が中心になるため、中学生の力は災害避難時の重要な担い手になっています。これまで訓練に参加してきた道仏中学校の生徒たちは、3年生が自主的に1、2年生をリードするようになってきていて、担い手として年々成長を感じられます。

昨年は新型コロナウイルスの影響で中学生の参加はなく、総合防災訓練として感染対策を想定して実施しました。避難所に避難する際に、いつでも持ち出せるように、「持ち出し品リスト」を広報に掲載して各家庭に配布しています。リストには一般的な持ち出し品と、感染予防のための持ち出し品を分けて、チェックリストをつくり、ウィズコロナ時代の災害に備えてもらうようにしています。家庭では、性別に関わらず、男女がお互い協力して命を守れるように日頃からの備えがより重要になってきています。

階上漁協女性部の皆さんは、いつもやる気に満ちていて、町の起爆剤のような存在です。前向きでパワフルな活動家のお母さんといったイメージです。「あっぱぁかっちゃぁズ」では、季節に応じたメニューや手軽に海藻を味噌汁に取り入れられる乾物などを提供していただいて、健康的な生活に役立っています。

（取材：千田　哲史）